ほっと

No. 53
2018 Spring

含松山 臨南寺

特集

道元禅師ものがたり ㉖

――病気療養のため永平寺を去り京都へ向かうことになりました

上洛の誘いを受けて

建長五年（一二五三）一月に行われた「八大人覚」の説法が、道元禅師の最後の説法になりました。

三月には「正法眼蔵三時業」に加筆修正をされています。三時とは現世、次世、三世のことで、「悪行の報いはいつか必ず来る。良い修行を重ねよ」と弟子たちに説かれています。

春から夏へ季節が進むと、道元禅師の病状はさらに悪化していきました。禅師の病状は、京都の波多野義重や覚念に報告されていました。報告を受けた義重は、次第に悪化していく病状を心配していました。京都に来て医師の診察を受け、きちんとした手当を受けるよう、上洛を勧める手紙を道元禅師に何度も送り続けました。

最初は義重の誘いを固辞されていた禅師もたび重なる書状に、「自分の病状の悪化によって、弟子たちの修行に差しさわりが出るのではないか」「京都で療養して健康を取り戻し、元気になって永平寺に戻って来よう」と考えを変えて、永平寺を去ることを決意されたのです。

木の芽峠での別れ

京都に生まれた道元禅師にとって都は生まれ故郷でもあります。

八月五日、禅師は懐奘と寂円をお供に京都に向けて永平寺を出発しました。波多野義重が手配した人足が禅師の乗った輿を担ぎ、配下の武士も従っていました。

北の越前地方と南の若狭地方を分ける木の芽峠は昔からの難所でした。義介は木の芽峠まで見送りに来ていました。実は義介は禅師に「どこまでもお供をさせてください」とお願いしたのですが、禅師から「永平寺のことを思えばこそ、そなたを留め置くことにしたのじゃ。私の留守の間、何事もおろそかにせず気を配ってもらいたい」と諭され、泣く泣く禅師に別れを告げて永平寺に帰って行きました。

禅師が木の芽峠で詠まれたのが

「草の葉にかどでせる身の木の目山
　雲にをかある心地こそすれ」

この歌は「草茂る木の芽峠から眺めると眼下の雲が永平寺につながっている気がする」という意味ですが、雲の上を渡って永平寺に戻りたいという禅師の思いが伝わってきます。

都で見る中秋の名月

木の芽峠から敦賀へ出た一行は、丹波路を経て京都に入り、高辻西ノ洞院にある俗弟子の覚念の屋敷に落ち着きました。覚念は波多野義重のいとこにあたる武士で、義重とともに永平寺の建立に尽力した人物でもあります。

覚念の屋敷で禅師は医師の手当てを受け、薬を処方されますが、病状が改善するきざしさえ見えませんでした。旅の疲れや残暑の厳しさも影響したかもしれません。

それでも八月十五日の夜には、こうこうと輝く中秋の名月を眺めて和歌を詠んでいます。

「また見んと思ひし時の秋だにも
　今宵の月にねられやはする」

「また見たいと思っていた都の名月を見ることができた。いつまでも眺めていたくて今夜はとても眠れそうにない」故郷にたどり着いた安心感の中に、死の予感が漂っているようです。

実際、この歌は道元禅師の辞世の歌になるのですが、その話は次回といたしましょう。

誘ひあひ 彼岸詣りの 老姉妹

星野立子

三月二十四日は彼岸会です ご家族そろってお参りください

春分の日を中日とし、前後三日をあわせた七日間をお彼岸と呼びます。今年は、二十一日が「彼岸の中日」、十八日が「彼岸の入り」、二十四日が「彼岸結願」になります。

悩みと迷いにあふれたこの世「此岸」に対して、「彼岸」は執着から解き放たれた安らかなあの世のこと。お彼岸の七日間は、彼岸に渡るために自分たちの生活を見直すとともに、ご先祖様のご冥福を祈る先祖供養の大切な時期なのです。

お彼岸は、平安時代の初め朝廷から始まり、やがて武士に広まり、江戸時代には庶民に行きわたりました。春分の日には太陽が真西に沈みます。西方浄土を拝むのに最もふさわしいと定着したようです。

臨南寺では、彼岸結願の二十四日午後一時から彼岸会施食会を修行いたします。施食会では、亡くなられた方のご冥福をお祈りし、先祖供養の法要を行います。ご家族そろって施食会にお参りいただき、お墓を清めご先祖様に手を合わせましょう。当日ご都合の悪い方は、不参でのご回向をお受けいたしますのでお問い合わせください。

ご家族そろって先祖供養いたしましょう

臨南寺 百景

御本尊様の修復を終えました

昨年七月から修復しておりました御本尊様ですが、年末までに無事修復を終え、一月十五日の弁財天祈祷会は、新年にふさわしく、新しい御本尊様の前で無病息災を願う法要を修行することができました。

修復にあたった仏師の方が長年積み重なった汚れを落としてみて驚いたのは、仏様にはどこにも破損したところがなく、全身が金色に輝いていたこと。そして、さらなる驚きは身にまとわれた衣に施された蒔絵の細密な装飾でした。

衣に蒔絵が施された仏像は東京国立博物館にも鎌倉時代のものがありますが、全国的に見ても非常に珍しいそうです。仏師の方も「実際に目にするのは初めて」と話されています。

御本尊様は江戸中期の作と伝えられてきましたが、新たに見つかった蒔絵の装飾について大阪府教育委員会では再調査を検討されているようです。

金色に輝く荘厳なお姿

全身の衣に施された蒔絵の装飾

住職日誌

日々是好日を道しるべに

臨南寺　住職　大澤正道

毎年二月になると春場所のため来阪する鏡山部屋の宿舎を、先代の頃より四十年以上境内に提供してきました。

昨年末より横綱による暴力事件等で世間を騒がせている相撲界ですが、土俵の上でこそ熱戦を繰り広げ、本来の姿をファンに届けて貰いたいと思っています。

鏡山部屋は現役力士二人と少ない状態ですが、互いに稽古に励んでいます。時には出稽古、時には四股をと少人数でも工夫しながら取り組んでいます。年寄名跡の歴史は古く江戸時代から引き継がれている名門で、先代の親方は横綱柏戸です。現在は元関脇多賀竜が鏡山を襲名し、相撲協会理事として協会の運営と弟子の育成に励んでいます。

彼らの姿を見ていると、「日々是好日」という言葉が浮かんできます。この禅語にはいろんな解釈がありますが、私は「日々をただ当たり前に生きることの大切さ」と考えています。

私も、「日々是好日」を胸に、何事にも精一杯取り組み、本来の姿・容を求め追及しながら日々の生活を送りたいと思います。

合掌

臨南寺行持予定（三～五月）

彼岸写経会　＊三月二十日　午前十時～午後三時（受付は随時）
亡くなられた方やご先祖を偲びながら、一文字一文字心を込めて、お写経なさいませんか？　大本山總持寺に納経させていただきます。（納経料千円）

彼岸会お墓経　＊三月二十日・二十一日　午前十時～午後三時（受付は随時）
お彼岸のお墓経を承ります。臨南寺にお墓をお持ちの方に限ります。（回向料一万円）

マトリお墓経　＊マトリにて。お日にちはお問い合わせください。
午前十時～午後三時（受付は随時）
お彼岸のお墓経を承ります。お申し込み多数の場合は各家ご同席での読経になります。（回向料一万円）

春季彼岸会施食会　＊三月二十四日　本堂にて
午後一時～午後二時三十分
お彼岸供養の法要を行います。お彼岸はご先祖様に感謝する大事な期間です。ご先祖様を偲び今あることに感謝いたしましょう。どなたでもご参加いただけます。（回向料一万円）

釈尊降誕会（花祭り）　＊四月八日　午前九時　本堂にて
お釈迦様のご誕生日に、感謝と報恩の法要を行います。誕生仏様に甘茶を注いでお祝いします。

がっしょう園マトリ合同法要　＊五月二十日　午後一時～
マトリにご納骨された方々の慰霊の法要を行います。法話を聞いた後、マトリでご焼香していただきます。

お気軽にご参加ください

早朝坐禅会
毎月第一土曜日（一月、八月は無し）午前六時半～　本堂にて

写経会
毎月二十日（八月は無し）午前十時～午後三時　写経料・千円

＊いずれも急に中止になる場合がありますので、前日に確認してください。

長い年月お導きいただき心より感謝申し上げます

私事ではございますが、三月十五日をもって退職させていただくことになりました。これまで皆様にお世話になりましたこと心より御礼申し上げます。

思い返せば、平成八年四月にお勤めしはじめました頃は、私の娘も中学生でした。今やその娘が中学生と小学生の子をもつ母親となり、二十二年の歳月の流れをしみじみと感じます。

この間、お寺では合祀墓のマトリが建てられ、お墓もずいぶん増えました。山門が建立され、新しい客殿と寺務所もできました。

また、何十年に一度しか行われないお授戒会を修行され、その歴史のなかに立ち会うことができたことも感慨深い思い出です。

お檀家様、お墓をお持ちの皆様、マトリの皆様に少しでもお役に立てればという思いでいそしんでまいりましたが、私のほうが皆様に教えられ、支えられ、励まされていたように思います。

お寺のことやお墓のことなど何もわからず、何もできなかった私を長い年月導いてくださったすべての皆様に心より感謝を申し上げます。

末筆ではございますが、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

ありがとうございました。

廣野三和子

もうじき桜の季節です

境内で一番早く咲くのは、本堂前にある河津桜。三月には満開を迎えます。彼岸会にお参りの頃もお楽しみいただけます。

臨南の森に歩道を設けました

徒歩の方や車椅子の方だけでなく、自転車の方もご利用ください。

昨年、当寺院の境内で数件の車両事故が発生しました。お車でお越しの方は境内では最徐行でお願いします。改善される様子が見られなければ、車両の乗り入れを禁止いたします。境内地での事故等につきましては、当寺院では一切の責任を負いません。

「ほ〜っと」53号
平成30年2月
編集・発行：棱伽林（りょうがりん）「ほ〜っと」編集室
〒546-0034　大阪市東住吉区長居公園1-32
TEL 06-6698-1001
FAX 06-6697-3330
Eメール：rinnanji@abeam.ocn.ne.jp
ホームページ：http://www.rinnanji.com

編集後記

九十歳以上の超高齢者が、日本で二百万人を超えるそうです。足腰が弱くなったり耳が聞こえなくなったり、体力は衰えますが、「感謝の気持ち」と「穏やかな幸福感」に包まれて毎日を過ごしている人が多いそうです。長寿への本当のご褒美と言えるかもしれませんね。（M）